

小子房

天皇が東寺を訪れた時、豪華な装飾が施された小子房と呼ばれる間で迎えられた。後宇多天皇（1265-1324）は、小子房に3年間住んでいた。明治維新（1868）までは天皇は多くの場合、退位後は出家をした。後宇多天皇は東寺を学者と真言の研究の場所にすることを望んだ。光厳天皇（1313-1364）は敵対する軍指揮官が京都を占拠していた約6か月間、小子房で生活していた。

現在の小子房は、9世紀に東寺の別当として東寺を拡大し、恒久的な禅定に入ったと考えられている空海の千百年御遠忌にあたり1934年に再建された。

小子房は、異なる内装で装飾された6つの部屋で構成されている。5つの部屋の襖は水墨画で飾られている。対照的に、勅使の間の壁は金箔で飾られ、その襖には鶴と山の風景の色彩豊かな画が描かれている。